

## 石が取りのけてある

ヨハネによる福音 20:1-9

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

### 説教

イエス・キリストの復活の日、おめでとうございます。

キリスト教信仰とほかの一神教（ユダヤ教、イスラム教）とのおおきな違い、分かれ目となるのが、復活信仰です。きょうはその記念の日、英語ではイースターと呼んでいて、この呼び方になじみを感じる人も多いのではないかとおもいます。

気分の問題だと思いますがキリスト教の三大祭をあらわすのに、イエスの誕生日というよりもクリスマス、イエスの復活日というよりもイースター、聖霊降臨日というよりもペンテコステ、こう呼んだほうが現代日本語としてはしっくり来るような気がします。

秘すれば花、秘せねば花なるべからずとなり、この分目（わけめ）を知ること、肝要の花なり。『花伝書』（風姿花伝）世阿弥

語り得ぬものについては沈黙しなければならない。『論理哲学論考』ウィトゲンシュタイン  
わたしは花伝書も（論理哲学）論考も読んだことはないのですが、これらのことばは有名です。イエスの復活を想うとき、これらの言葉がふと浮かんできました。

「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」という考えにウィトゲンシュタインがたどりついたのはいろいろ（紆余曲折）あったようですが、わたしはキリスト復活という信仰の事実が彼の論考にとっておおきな課題だったのではないかと自分なりに考えています。復活という事実の前に「沈黙するしなければならない」それは「語りえぬもの」だからだ、うすっぺらいといえは薄い通俗的な解釈ですが、わたしはそんな風にうけとめています。

世阿弥の「秘すれば花」ですが、これもイエス復活を思うとわたしの中に浮かんでくることばです。

ところで、復活という重大な秘儀を広めることがキリスト宣教の眼目になるのかが、直線的にわからない、なんかピンとこない、という感覚がわたしにはあります。大切であり重要なことは隠しておく、秘しておく、そのほうがいいのではないかと考えてしまうのです。それは「秘すれば花」の意味を、秘めるからこそ花になる。秘めなければ花の価値は失せてしまう、として捉えるからでしょうか。キリスト復活にあてはめていうと、復活という秘儀は秘密にしてこそ価値がある、となりますか。わたしの気分としてはここで、ウィトゲンシュタインの「沈黙」と重なります。

「秘すれば花」には「この分目を知ること、肝要の花なり」ということばがすぐに続いているそうです。分目を知ることこそが肝要、わけめこそが重要

だと続いているわけです。

キリストの受難、つまり十字架上の死亡に続く三日目のキリスト復活、このわけ目のなかに「肝要の花」がある？まさか世阿弥はキリストを想って花伝書を記したのではないでしょうが、「秘すれば花」ということばの裏側からはこんな連想も浮かんできます。

聖書のみことばからずいぶんと脱線してしまいましたが、わたしたちは聖書のことばに聴き入ることが肝要です。人のことば（わたしの説教）は沈黙することで復活の主日の結びといたします。主の復活、過越のキリスト、おめでとうございます。

---